

ひ、第二篇を習合咒法時代として天正時代迄を含め以下を第三篇退化咒法時代に於て述べて居る。誠に勞作を稱すべく種々の興味ある考證と説話をその中に含んで居るが大體をいへば従來の研究を集成せるものもしくは廣く材料を集めこれに一の組織を與へたものといひ得るであらう。その考察に於てはなほ十分ならざるものがあるように思はれる。著者のいふ如くこの問題はその關するところ甚だ廣きものがある。本書の出版によつてその研究に對する興味の普遍化するを祈るに共に著者が益これに精進してその大成に至るべきを願ふ次第である。(菊判七四三頁、價七、五〇圓、東京大岡山書店發行)(肥後)

●都市平安京變遷史 附古地圖集

藤田 元春著

近代經濟生活の發展に伴うて急速に膨脹する郊外地域の亂雜と無秩序とを慨するものは必ずや千年の昔荒漠たる原野を拓いて條坊の方格を定め、規矩整然たる大都市計畫を實現した平安朝の政治家を想ひみるであらう。當

時の面影を傳へるものは舊京都の街衢である。然もその舊京都の市街は決して簡單に想像せられるが如く單一なるものではなくして、その中に自ら三種の異なる地割を有し、それはまたそれ／＼に異なる時代を反映する、換言すればそれら三種の地割はいはゞ層位的に平安京地域變遷の跡を物語るものなのである。この事實を古地圖の示すところに基いて考證論斷しようとしたのが本書前半の要旨である。著者はそれによつて前置「尺度綜考」に於いて得たところの、「古い地割は永續する」三といふ命題に更に有力なる證左を與へた。併しながら本書はもこより、この一般公式の例題的適用ではなくして、それに加へられた種々なる歴史的因素に就いても十分なる考察をなしてゐる。例へば、中世下京の發展に祇園の神人座商の勢力の興つて力多きを説けるが如きであり、著者は更に進んで祇園會の有する經濟的意味にまでも言及する。敘述もこより簡略ではあるが示唆する所が多い。而してそれらの敘述を通じて見られる所のものは著者の趣味であり人柄である。蓋し、古地圖そのものは無言である、その

上にかくも多くの意味を読みこるものは著者の主観でなければならぬ。實に本書をかくの如き形にまで作り上げたものは著者のその郷土に對する深き愛であり、紙面上に於いてそれに接することが本書を通讀するもの、喜びである。尙本書はその後半に於いてかくの如き研究の資料もなつた寛永平安町古圖以下十七種の古地圖をコロタイプを以つて収録し、それに一々親切なる解説を施してゐる。唯惜しむべきはその圖版の或るものが餘りに細微にして不幸擴大鏡を以つてするも猶その文字を判讀するをえないもののあることである。かくの如きは種々の事情もあることであらうが、今少しく大きく、且つなるべく一枚々々自由にこり離して、解説と共に見うるが如く印刷製本することは出来ないものであらうか、且つ瑣細なこみではあるが各地圖にその原寸（若しくは寫眞としての縮尺）を明記して欲しい。著者に第二輯刊行の意あるを聞き特に附記する。（四六倍判、本文一六五頁、圖版二四葉、定價六、〇〇圓、京都ス、カケ出版部）

〔柴田〕

●大垣市史

大垣市役所編

近來各縣市町村に於て其他の郷土史を編纂することが盛んになつて來たが、今又本市史が編纂刊行されるに至つたことは洵に喜ばしい事である。大垣は美濃國の西部平野の中樞に位し往古東大寺の一莊園たりし大井莊より發達し、今日に至るまで一千有餘年、戰史上、文化史上極めて興味ある史實に富んだ所である。市當局は大正六年より本市史の編纂を企て、大正八年に郷土史の權威者伊藤信氏に之を依頼した。爾來伊藤氏は公務の餘暇東西に奔走して史料の蒐集に努め、殆んど獨力を以て編纂に當り、拮据十年にして此の一大市史を完成されたのである。上巻は通史にして上古より現代に至る大垣市の一般史を述べ、上古の大垣地方、大井莊時代、戸田家以前の大垣、戸田家時代、明治大正昭和時代の五編に分ち、中巻は分科志にして市街、神社、寺院、學藝、教育、治水、災害、産業、交通、人物、風俗、史蹟名勝等の諸編とし下巻は資料編にして古文書及び金石文を収めてある。就